

ドヴァーラヴァティー時代のセーマ石の配置

辻角 桃子

要旨

ドヴァーラヴァティー時代の東北タイに顕著にみられる仏教遺物であるセーマ石に関する研究は、これまで図像に注目したものを中心に行われてきた。考古学分野では、型式分類、分布域の確認といった研究がなされているが、セーマ石それ自体にのみ焦点を当てたものであり、その配置される状態、つまり考古学的コンテキストに注目した研究はなされてこなかった。本稿では、セーマ石が置かれるコンテキストに注目し、配置されたセーマ石の個数、配置形態、結界の対象物について分析・検討することで、セーマ石を置くという現象を捉える研究の一試案を提示し、ドヴァーラヴァティー時代の東北タイにおける上座部仏教の信仰の様相について考察できるか検討する。

キーワード: ドヴァーラヴァティー、セーマ石、遺構配置、東北タイ、上座部仏教

はじめに

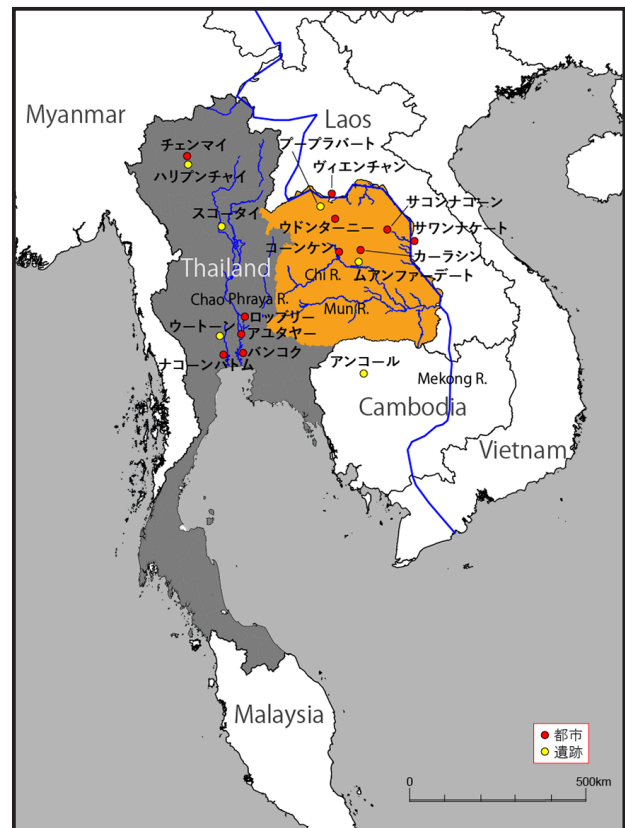
ドヴァーラヴァティー (Dvāravati) は、6～11世紀にかけて、タイ湾沿岸にあった仏教を宗教的基盤とするモン (Mon) 人の都市連合体、および東北タイに広がった仏教を基盤とする環濠集落群である⁽¹⁾。モン語碑文、法輪をはじめとする仏教関連遺物・遺構、独特の美術様式がその視覚的標識となる。「陳書」や「旧唐書」、「新唐書」などの歴史書にもその名がみられ、陳に朝貢したことやドヴァーラヴァティー社会や風俗について詳しい記述がある。また、美術史におけるドヴァーラヴァティー様式の特徴をもつ仏像や法輪、セーマ石といった共通する考古遺物を残している (新田2005; 2013)。

中でもセーマ石⁽²⁾は、東北タイに顕著にみられる仏教関連遺物である (第1図)。セーマ石とは、聖域と俗世界を隔てる境界に置かれる板碑状の石のことで、日本語では結界石と訳される。サンガと呼ばれる仏教僧団には、戒壇式や布薩儀礼を行う聖域空間 (界) が必要で、儀礼をおこなう戒壇のある建物の周りにセーマ石を置き、布薩堂をつくる (原田2017b: 56)。ドヴァーラヴァティー時代に仏教の受容とともに出現したと考えられ、13世紀にこの地域の覇権がモン人からタイ人にかわったあともセーマ石を置く慣習は継承され、スコタイ朝、アユタヤ朝の遺跡にも残されている。さらにラタナコーシン朝に至るまで使用され、現在も寺院の建立の際はセーマ石が置かれる。

その中でも、東北部のドヴァーラヴァティー時代のセーマ石は、仏教モチーフや仏教説話の一場面が彫刻されるなど、美術的にも目を見張るものが多く、1950年代から本格的に研究対象とされてきた。しかしその研究の中心は、セーマ石に描かれる図像が仏教説話のどの場面

にあたるかといった美術史的なものである。型式分類や分布調査などはなされてはいるものの、発掘調査は限られた遺跡でしかなされておらず、本格的な考古学的分析はこれからという段階であるといえる。

本稿では、セーマ石の遺構配置という今までの研究とは異なる考古学的視点で、当該地域・時代の仏教の受容の様相について検討することができるかどうか、一試論として提示したい。



第1図 タイの主要都市・遺跡

1. 背景知識

現在、タイをはじめとする東南アジア大陸部では、上座部仏教が広く信仰されている。ドヴァーラヴァティーでも、考古資料や碑文史料、漢籍史料から仏教信仰の様子がうかがうことができ、特に仏教に関する碑文はほとんどパーリ語であることから、パーリ語を聖典の言葉として用いた上座部仏教を主として信仰していたと考えられる。13世紀に入りタイ人の国が勃興する以前、中部でも北部でも仏教の担い手は、モン人であり、その後もタイ仏教が発展するうえで、モン人の仏教文化は重要な役割を果たした。現在もミャンマー南部を中心に、またタイ国内に少数ながら暮らしているモン人の人々は、各時代において仏教の普及に深くかかわり、高度で洗練された文化を築いた(原田2017a: 15)。

ここで、現代の寺院におけるセーマ石の果たす役割について述べておきたい。セーマ石は聖域と俗世界を隔てる境界に置かれるが、これは聖域と俗域の間に結界をつくることを意味している。セーマ石によって結界されるのは、一般的にタイ語でウボソットと呼ばれる布薩堂が主な例であるが、ウィハーラと呼ばれる本尊が安置される本堂にもセーマ石は置かれることがある。このような仏堂では、僧として出家するための儀式である得度式や、ウポーサタという仏日に「具足戒」を誦し自らを省みる、僧にとって最も重要な儀式が行われる。これらの儀式は必ずセーマ石で囲まれた仏堂のなかで行われなければならない。戒律の誦中では、在家者は仏堂に立ち入ることができない(石井1991: 199)。つまり、セーマ石を置くという行為によって、聖なる空間がつけられ、そのなかで上座部仏教僧団の中心的儀式が行われるのである。

さて、前述のようにドヴァーラヴァティーの主な遺物は仏像や法輪、セーマ石である。ドヴァーラヴァティー様式の仏像は、インドのグプタ様式やスリランカのアヌラダブラの仏像の影響を強くうけてつけられ、中部や東北部だけでなく北部や南部まで広範囲に認められており、その造成時期は地方的な広がりも含めて長期間にわたる(原田2017a: 14)。広範囲にわたってみられる仏像に対して、中部で数多く見つかっている法輪⁽³⁾は、東北部ではほとんど見られない。さらに、東北部で大量にみられるドヴァーラヴァティー時代のセーマ石は中部での出土例がない。法輪とセーマ石の例は、同じ民族でも受容した仏教を信仰するにあたって、それぞれの地域社会の背景によって換骨奪胎し、新たな仏教美術を生み出してきたことを示している(原田2017b: 57)

このように、ドヴァーラヴァティー時代の仏教遺物には、中部の法輪に対して、東北部のセーマ石という構図

を見て取ることができる。そのため、東北部の仏教信仰の様相を捉える考古遺物として、セーマ石は重要な意味をもつといえる。

2. 研究史

ドヴァーラヴァティー時代の東北タイでの仏教信仰の様相を捉えるうえで重要な指標といえるセーマ石であるが、これまで様々なアプローチにより研究が進められてきた。先行研究の主な方法論は、1. 図像研究、2. 型式分類、3. 分布範囲の調査の3つである。また、セーマ石の出自に関する研究も特筆すべきものであるため、この項で述べることにする。以下、研究内容ごとに概観していく。

2-1. 図像研究

1954年にErik Seidenfadenが大量のセーマ石がみられる遺跡ムアンファーデート(Muang Fa Daet Song Yang)の写真から、この遺跡のセーマ石がタイ中部のドヴァーラヴァティー様式を呈すると判断し、しかしながら中部のものとは異なったスタイルをもつものであることを提言した(Seidenfaden 1954: 643-647)ことが、セーマ石研究の端緒である。Seidenfadenはこれらのセーマ石をドヴァーラヴァティー様式とした根拠を示していないが、仏像の大衣が後ろ側から両手首を経て前方にU字形に垂れていることや螺髪が大きく巻いているといった特徴をもっていることからそのように判断したと推察される。

Seidenfadenの最初の研究に続いて、タイ芸術局(Fine Arts Department of Thailand)が1954年にムアンファーデートの調査を行った。この調査についての報告は出されていないが、収集されたデータをもとにセーマ石の図像の分析を行ったのがM. C. Subhadradis Diskulである(Diskul 1956)。Diskulはタイ芸術局の調査で撮影された7枚の写真を分析することによって、セーマ石に描かれる図像がタイ中部でみられる美術と類似していることを指摘し、チャオブラヤー流域で繁栄したドヴァーラヴァティー様式、特に6~11世紀のナコンパトムのもと同様のものとした(Diskul 1956: 363)。彼はセーマ石の様式的な特徴を分析することで、これらに描かれる図像を東北部特有のドヴァーラヴァティー様式として認識した(Diskul 1956: 364)。この研究はタイ中部のドヴァーラヴァティー様式とセーマ石を関連付け、共通する様式的な特徴を多く見出すことに成功した。

以上のように1950年代に行われたセーマ石の初期の研究は、美術的に価値が高い仏教芸術が彫り込まれたレリーフや宗教遺物が描写されたシンボルを主題として、美学や芸術の観点からセーマ石を捉えるものが主であっ

た。これは、タイの美術史におけるドヴァーラヴァティー様式の位置付けとセーマ石研究の礎として大きな枠組みをつくるのに寄与した。

1970年代以降は、セーマ石に描かれる図像が、釈迦の生涯を表す仏伝や、釈迦の前世の物語であるジャータカ（本生譚）といった仏教説話のどの場面にあたるかを特定するものがセーマ石研究の主眼となった。

Piriya Krairikshの研究は、セーマ石の美術史的な観点からの研究として最も包括的なものである。Krairikshはコーンケン国立博物館所蔵のセーマ石に描かれたジャータカの場面の特定を行った。また、様式的な根拠から、年代にも言及しており、当該セーマ石の年代を9世紀に推定できると主張している（Krairiksh 1974: 57-58）。彼の業績はセーマ石に描かれる図像の特定を進めたという点で非常に価値が高いが、Diskulが1950年代に行っているのと同様に、説話のエピソードにのみ焦点を当てた研究であった。また、コーンケン国立博物館のセーマ石の大多数は、蓮弁型または柱型の図像の描かれていないものであり、その出自は主にムアンファーデートとバンノンハンの2遺跡からのものである。そのため、SeidenfadenとDiskulと同様に、非常に限られた地理的範囲の、相対的に数が少ないサンプルのみ分析対象としているといえる。

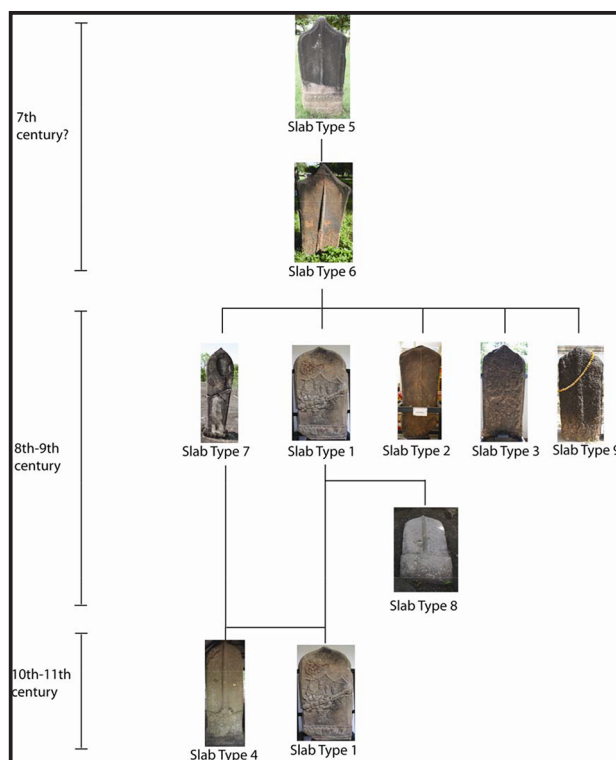
近年のセーマ石の図像の研究者としてはArunsak Kingmaneeがあげられる。Kingmaneeのアプローチは、一つの論文である特定のセーマ石のみに焦点を当て、そこに描かれる図像が仏教説話のどの場面なのかを特定しようという試みである（Kingmanee 1996等）。彼は様式についても論じており、図像と様式的な特徴の両方を見ることで、セーマ石の相対的な年代を見出している。Krairikshが始めた研究の流れを継承し、セーマ石のレリーフの主題的な内容についてだけでなく、一般的なドヴァーラヴァティー美術研究への貢献も果たしている。

2-2. 型式分類

セーマ石に描かれる仏教説話の内容の解釈が中心に行われてきたなかで、初めてその形態に注目した研究を体系的に行ったのがKrairikshである。Krairikshはセーマ石の分類として蓮弁型（slab type⁽⁴⁾）と柱型（pillar type）の2型式を設定し、さらに柱型には、ろうそく柱型（tapered pillar type）、八角柱型（octagonal pillar type）といったバリエーションをつけた（Krairiksh 1974: 38-40）。翌年、Vallibhotamaがこの分類に不定型（unfashioned type）を加え（Vallibhotama 1975: 90）、蓮弁型、柱型、八角柱型、不定型という4類型はその後多くのセーマ石研究において使用されている（第2図）。



第2図 セーマ石の型式分類

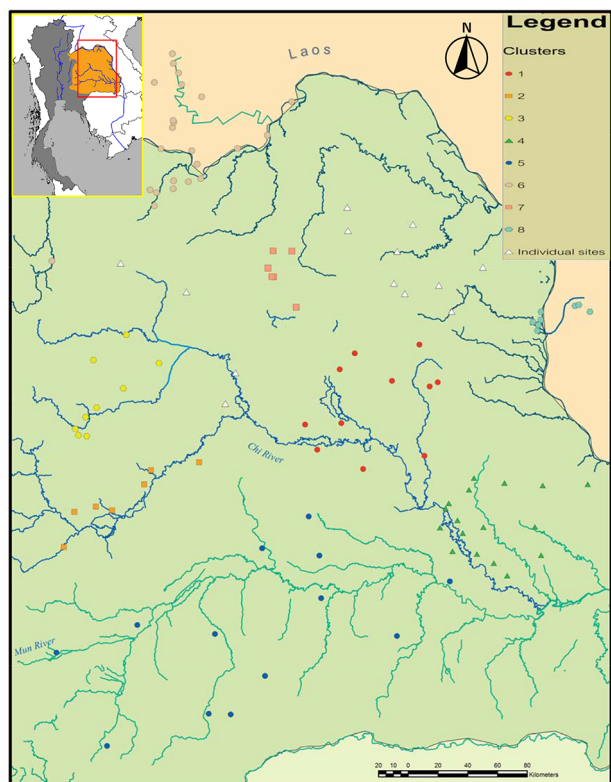


第3図 Murphyによる型式編年表（蓮弁型）

21世紀に入り、Stephen A. Murphyが改めて型式分類を行っている。彼はKrairikshの分類をもとに、細分化した分類を行っており、蓮弁型を9つ、柱型、八角柱型をそれぞれ4つ、不定型を2つの細別型式に分け、描かれている図像や刻まれた碑文をもとに類型ごとの編年案を提示している。この編年案では、7世紀から10,11世紀までの大まかな年代を設定している（Murphy 2010: 360-363、第3図）。

2-3. 分布調査

セーマ石研究における主なアプローチの3点目にはセーマ石の分布範囲の解明があげられる。ドヴァーラヴァティー時代のセーマ石が東北部に集中して見られることは古くから知られていたが（Wales 1969）、包括的な分布調査が行われたのは1970年代に研究が進展期に入ってからのことである。また、この研究は環濠集落遺跡（moated sites）や盛土遺構（earthen mounds）といった



第4図 Murphyによるセーマ石の分布域

セーマ石が所在している遺跡の性質との関連について研究がされているのも特徴である。

初めて東北部に分布するセーマ石の範囲を確認しようと試みたのが、Srisakra Vallibhotamaである。タイ東北部全体のセーマ石の所在と範囲を調査し、東北部タイにおけるセーマ石の分布をムーン川流域、チー川流域、ウドンターニー・サコンナコーン地域の3つに分類した (Vallibhotama 1975)。河川の流域による分布域の設定は、仏教の広がりや河川の流域と関連付ける考え方を示している。これは、セーマ石の所在・立地に注目した、つまり考古学的観点で初めての体系的な研究であり、東北部全体のセーマ石の分布の広がりについて示したことはこの遺物の研究を大いに進展させた。また、彼は1985年の論文で、東北部全体でセーマ石が環濠集落遺跡に付随して見つかることを指摘している (Vallibhotama 1985)。

2000年代に入ると、東北部タイの北に隣接しているラオス中部・南部でもドヴァーラヴァティー時代のもものとみられるセーマ石が次々と発見された。これらの成果により、セーマ石の文化の範囲は、従来の東北部タイのみに焦点を当てていた学説よりも幾分大きいことが示された。Anna Karlstromは原位置を保つドヴァーラヴァティー時代のセーマ石が数多く発見されたバンヴィエンカム の発掘調査をしている。彼女は出土したセーマ石の年代

を8～9世紀に設定している (Karlstrom 2009)。また2008年にはMichel Lorrillardが、ラオス中部・南部で行った調査によって新たに発見されたセーマ石について論じており、ドヴァーラヴァティー時代のセーマ石が見つかったヴィエンチャン14遺跡、サワンナケート3遺跡について記録している。Lorrillardはラオスの多くの遺跡で見つかるストゥーパクンバ (stupa-kumbha⁽⁵⁾) のモチーフや原位置を保つセーマ石を考古学的証拠として比較することによって、ヴィエンチャンとサワンナケートで見つかるセーマ石が東北部タイに存在した文化と同様のものであることを結論付けた (Lorrillard 2008)。日本人のタイ研究のパイオニアである新田栄治も、この地域にセーマ石が分布していることを2005年と2010年の調査で確認しており、ドヴァーラヴァティー文化はメコン川左岸にまで浸透していたと指摘した (新田2013)。

これらのラオスでの新発見を反映して、Vallibhotamaの調査をもとにMurphyがさらに詳細な分布調査を行った (Murphy 2010)。MurphyはVallibhotamaが調査したのと同様に東北部タイ全土のセーマ石の分布について調査したが、後者が1975年の論文で分析対象とした32遺跡に対し、前者は111遺跡 (うち17遺跡はラオス、1遺跡はカンボジアに所在) を対象としており、より精度の高い調査を行っている。Vallibhotamaが分類した3つの分布域はMurphy2010で、ラオスでの新発見のためにウドンターニー・サコンナコーン地域をメコン中流域と変更したほか大きな相違はない。彼はセーマ石の図像や様式、年代、遺跡の性質などの観点から、チー川流域に4群、メコン中流域に3群、ムーン川流域に1群といったさらに細かな分布群を設定し、チー川流域のカーラシン・ローイエット・マハーサーラカム県の第1群、チャイヤブーム・コーンケン県の第2群をセーマ石の中心地であると示している (Murphy 2010: 208、第4図)。

遺跡の性質との関連性については、1980年のBernard Groslierの論文で、考古学的分析の中でセーマ石の分布を理解しようとする試みのなかでなされた。Groslierは東北部タイへのクメールの進出範囲を考古遺物の検証によって行おうと試み、この地域に広がる固有の居住である環濠集落遺跡について研究していた。彼は、このような遺跡の中央に寺院を建造するという文化について、地元の民衆がクメールによって支配されたことの現れとして考えた。一方、セーマ石をもつ環濠集落遺跡については、「石柱文明 (civilisation des steles (stèle civilisation))」という別個の文明としてみなした。この文明はクメールとドヴァーラヴァティーの双方から独立しており、「石柱文明」の中心地はカーラシンやサコンナコーンとし、その中でも特にムアンファーデートが中

心であるとした (Gloslier 1980: 33-60)。

これに対し、Murphyは分布調査によって多くのセーマ石が環濠集落遺跡以外に分布する事実を提示し、環濠集落遺跡とセーマ石との関連性を否定している。さらに、図像という観点では、仏伝やジャータカが描かれたセーマ石が第1、2、6群という非常に限られた地域でしかみられないことに対し、軸状仏塔やストゥーパクンバのモチーフをもつセーマ石が地域に限定されず、全域でみられることを示した (Murphy 2010: 208)。

一方、新田栄治は、セーマ石の分布域が先史時代の塩鉄生産地と重なっていることを提示し、環濠集落などの鉄器時代以来継続した居住に人口が集中化し、仏教を信奉する集団が存在するようになったとしている (新田2013)。

2-4. 巨石文化との関連性

以上、セーマ石研究における主要な3つの方法論について述べてきた。ここでは方法論とは異なるが、セーマの配置を研究するうえで注目すべき着眼点として、先史時代に東北タイで進展したと考えられる巨石文化に関する言及について述べておきたい。

1969年、H. G. Quaritch Walesは著書でドヴァーラヴァティーの著名な遺跡の解説とその文化や社会について体系的に論じており、東北部の章では、セーマ石について記述している。ここでWalesは、タイ芸術局が1959年に出版した東北タイの遺跡の調査報告書での「巨石が円状または列状に配置される例がこの地域全体でみられる (FAD 1959: 61)」という指摘を論拠として、セーマ石が巨石文化 (megaliths) から発展したという仮説を初めて示した (Wales 1969: 111)。

No Na Paknam (1981) と Vallibhotama (1985) は東北タイに巨石文化が存在するというWalesの主張を支持している。Paknamは、マハーサーラカム県では水田に石の並列線が規則正しくみられ、チャイヤブーム県では巨石がストーンサークル内に置かれている、といった証拠を示し、Walesによる東北タイ固有の巨石から発展したという説を支持した (Paknam 1981: 60-62)。

Vallibhotama は、巨石文化は新石器時代から青銅器時代という移行期に存在したが、東北部のエリアではこの文化が他より長く続き、歴史時代が始まる時点でも未だ活発であったとした。ムーン川・チー川流域では、埋葬遺跡に立石を据えるという文化が長い間普遍的であったとし、巨石によって囲まれたマウンドは儀式を行う空間である、という主張をしている。さらに、仏教がこの地域に入ってくると、この慣習は新たな地域に順応していったとしている (Vallibhotama 1985: 32-33)。

一方、KrairikshはWalesの巨石文化説を批判してい

る。KrairikshはWalesが論拠としたタイ芸術局の報告書の記述で円状に配置された巨石としているものが実はセーマ石であったと指摘した (Krairiksh 1974)。同じく、Murphyは、いくつかの論理によって問題点を検証し、巨石文化からセーマ石が生まれた、さらにはセーマ石が巨石に関連するという説は、実証的な証拠が欠如しているため否定できるとした。セーマ石を置くという慣習は、巨石からの発展ではなく、この地域に新たな宗教である仏教が浸透したことで、聖域を結界する必要が生じたからであると結論付けている (Murphy 2010: 365-372)。

3. 現状と課題

以上のように先行研究では、美術史的な観点からはセーマ石に描かれる図像に注目した研究、考古学的な観点からはその形態や分布域に注目し分類する型式学研究や分布調査がなされてきた。美術史と考古学の研究成果が長年隔たりをもってきた点が問題視されてきたが (Murphy 2010: 22)、Krairiksh やMurphyのように美術史的観点と考古学的観点の双方からセーマ石について考察する学際的な研究も進んできている。

しかしながらそれらの研究は、個々のセーマ石を遺物として捉え、その形態や図像を分類・検討するものが多くを占め、結界という特殊な空間を形成する遺構として、セーマ石を捉えようとする研究はほとんどなかった。そういった事情もあり、セーマ石個々の特徴について叙述的な理解は進んできた一方で、実際にセーマ石が果たしてきた機能・役割について深く言及している研究は多く見られない。セーマ石は仏堂の周りに置かれ、結界をつくったということを当然の事実のように捉えて看過している表れともいえる。実際、東北部に顕著にみられるドヴァーラヴァティー時代のセーマ石が置かれる状態は多岐にわたることが指摘されているが (Murphy 2010: 122)、それについて細かな分析を試みた研究はまだ世に出ていない。

以上のような研究の課題から、セーマ石が置かれる状態、つまり考古学的コンテクストに着目しその構造について分析していくことが必要であると考えられる。また、この観点からの分析により、セーマ石を置くという行為、つまり動態を、その配置構造という静態から復元することができるのではないだろうか。セーマ石そのものの特徴について解明が進んできたこの分野の研究において、仏教の実践の中でセーマ石を置くという行為のもつ意味について考えることが必要ではないだろうか。

しかし、セーマ石の遺構配置について研究を行うには、セーマ石が配置された当初の位置をとどめているの

かという大きな障壁があげられる。コーンケン国立博物館が所蔵しているセーマ石は170ほどあるが、ムアンファーデートなどの遺跡から移設されたものであり、言わぬがな元あった位置をとどめていない。また、「ムアンファーデートには100を超えるセーマ石があったが、そのほとんどは1935年か36年のいずれかに村人たちによって周辺の地元の寺院に移された (Seidenfaden 1954)」という記述があるように、セーマ石が近隣の寺院に移動している例がみられる。これは結界をつくるという本来の用途を超え、セーマ石自体が信仰の対象となったため起こりえた事例である。このようにセーマ石が元あった位置から移動している事例はタイのあらゆるところでみられ、セーマ石を結界という特殊な空間を形成するものとして見ようとする研究が進んでこなかった大きな要因の一つであると指摘できる。

しかしながら、現在みられる配置から判断して、当時の原位置保つと考えられるセーマ石も少なからず存在しており、ドヴァーラヴァティー時代のセーマ石もその例外ではない。Murphyは実地調査において、26遺跡のセーマ石は元あった場所に存在しており、そのうち11遺跡のセーマ石は配置されたときの位置をとどめていると判断している (Murphy 2010) ⁽⁶⁾。

そこで本稿では、セーマ石の遺構配置について分類の観点を見出し、研究の視座として提示する。

4. セーマ石の遺構配置

セーマ石の配置については、考古学的記録や文献からうかがい知ることができる。

4-1. セーマ石の個数

現在の東南アジアの上座部仏教寺院では、布薩堂の周りを囲むセーマ石は8基もしくは同じ個所に2つずつ配置して16基で配置される (第5図)。

しかし、ドヴァーラヴァティー時代の遺跡では、24ものセーマ石で結界する例がみられる (Murphy 2010: 86、第6図)。また、バンコクの寺院ワット・スタットテープワララムの19世紀の文書では、3、4、7などの数で結界をつくることが記述されている (Paknam 1997: 60、第7図)。そのため、現在のセーマ石は8基というセットで置かれるが、結界をつくるにはこの配置のみに限定されないことが指摘できる。つまり、8基という決まった個数での配置は、のちの時代になってから確立されたと考えことができ、ドヴァーラヴァティー時代のセーマ石の配置を捉えるためには、個数による分類と検討が必要である。

4-2. セーマ石の配置形態

セーマ石の配置形態、並べ方としては、建物を取り囲む形である方形配置が一般的なものとして理解されている。しかし、円状に並ぶものや、直線状に並ぶものも、ドヴァーラヴァティー時代のセーマ石の中には少なからずみられる。このような並べ方では、結界内部に布薩堂などの建築物があったことが考えられないため、セーマ石ではなく巨石であるとする根拠の一つとなっている (Murphy 2010)。しかし、次項にあげるように、方形で配置されずストゥーパのような構造物が結界されていたと考えられること、布薩堂がなくても仏堂の一角や屋外でも結界がつけられることなどがあるため、一概に巨石であったとするには不十分な根拠であると言わざるをえない。さらに、配置形態が不定形な例もみられるが、これは置かれた当時の原位置をとどめているものなのか、後世に動かされたものであるのか、判断することが難しい (第8図)。ドヴァーラヴァティー時代でのセーマ石を置くという行為の意味を検討するためには、配置形態による分類が必要であるといえる。

4-3. 結界の対象物

セーマ石が結界をつくる対象物については、方形に並ぶ現代の寺院から理解できるように、布薩堂または礼拝堂などの建造物が基本である。ただ既に述べたように、正式な宗教儀式はすべて結界の中で行う必要があるが、布薩堂がなくても、仏堂の一角や屋外でも結界をつくることはある。この場合、建造物はつくられず、儀式の空間がつけられる。

また、現在のの上座部仏教の結界であるシーマーには、マハシーマーとカンダシーマーの2種類が存在する。前者は寺院全体を覆う結界であり、後者は寺院内で儀式が行われる特定の場所に結界される (第9図)。この考えによると、カンダシーマーの典型が布薩堂であるといえる。ドヴァーラヴァティー時代にこのような結界の区分があったかどうかは、証拠が不足しているため判断できないが、ムアンファーデートのような多くのセーマ石が見つかる遺跡ではカンダシーマーだけでなく、マハシーマーもまた結界されていた可能性が考えられる。しかし、この仮説を実証できる原位置をとどめる考古学的コンテクストは現時点では確認されていない (Murphy 2010: 103)。

さらに、タイ芸術局によるムアンファーデートの発掘調査では、セーマ石がドヴァーラヴァティー時代の布薩堂の周りからのみならず、ストゥーパの傍から3個体出土している (Murphy 2010: 95)。2000年の発掘でもストゥーパの付近からセーマ石が出土しており、セーマ石が布薩堂やその他の宗教的建造物のみならず、ストゥーパの周

りにも置かれていたことが示されることを裏付けた。

一方、ウドンターニー県のプープラバート歴史公園では、先史時代に造成されたと考えられる笠形奇岩の周りにもセーマ石が置かれている（第10図）。これは、もともと土着の信仰の聖域として利用されていたものが、仏教受容後に仏教の聖域として使用されるようになったため、セーマ石を配置したことが推測できる（Murphy 2010: 95-96）。

チャイヤプーム県の10～11世紀のセーマ石には、セーマ石によって結界された空間に仏像を安置したと解釈できる碑文が刻まれている（Woodward 2005）。セーマ石がつくる結界の対象は、僧の集会のためではない、仏像などの信仰の対象を置くための聖域をも想定にいれる必要がある。

このように、結界の対象となるものは布薩堂や礼拝堂に限定されず、特にドヴァーラヴァティー時代にはストゥーパや仏像などもその対象であったことが想定できる。そのため、4-1、4-2で述べたセーマ石の個数や配置形態を分類したのちに、さらにその配置によってつくられた結界の対象について検討することが必要である。現段階でセーマ石によって結界される対象として可能性がある指摘できるものについて、まとめると以下ようになる。

- a. 布薩堂、本堂などの僧の儀式を行うための建造物
- b. 建造物を必要としない儀式空間
- c. ストゥーパや仏像などの礼拝対象

4-4. 分析視点

以上の検討から、セーマ石による結界の対象物を特定するために、以下のような視点での分析を行うことが有効であると考えられる。

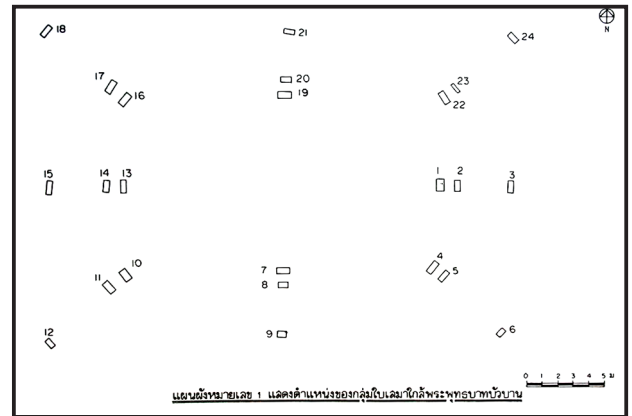
1. セーマ石の個数・方向
2. セーマ石の型式・図像
3. セーマ石で囲まれる範囲＝結界の形態・規模

1はセーマ石のコンテキストに着目した考古学的視点であり、結界の対象物の性格によって、配置されるセーマ石の個数とその方向に影響を及ぼすことがあるのかという検討となる。例えば、8基、16基、24基のセーマ石は、それぞれ一重、二重、三重の結界をつくると考えると、形成される結界の質に違いが生じる可能性が想定できる。

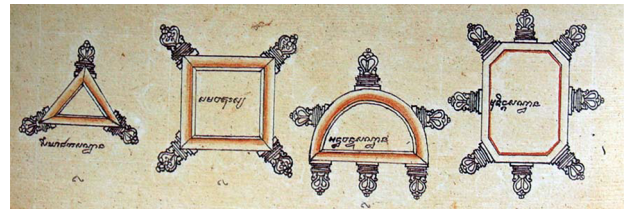
2は、これまで進展してきた個別のセーマ石研究の成果との組み合わせにより、セーマ石のもつ遺物としての特徴が、遺構としての性質に影響を及ぼすかどうかを検討する。想定できる分類として、一遺構内のセーマ石の型式が、すべて蓮弁型であるか柱型であるか、あるいはその組み合わせであるかなどがあげられる。また、仏教説話やモチーフが図像に描かれるセーマ石であれば、図像の違いによって結界の対象の性格に違いが見いだせる可能性がある。さらに、各セーマ石の法量も考慮に入れ



第5図 ワット・ケーオのセーマ石



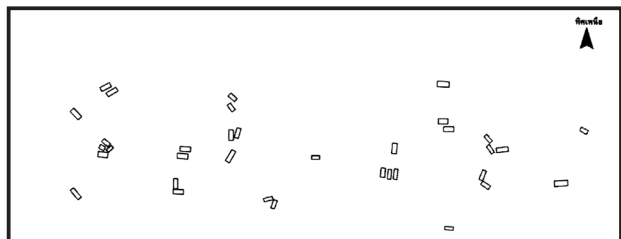
第6図 ワット・プラプタトバートブアバーンのセーマ石配置



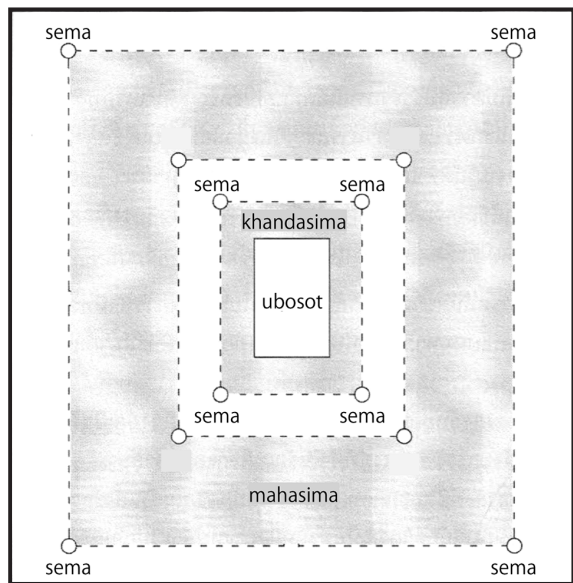
第7図 文献にみられるさまざまなセーマ石配置の例

る必要があるだろう。

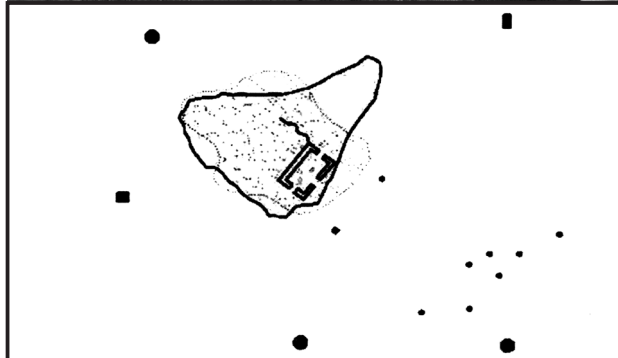
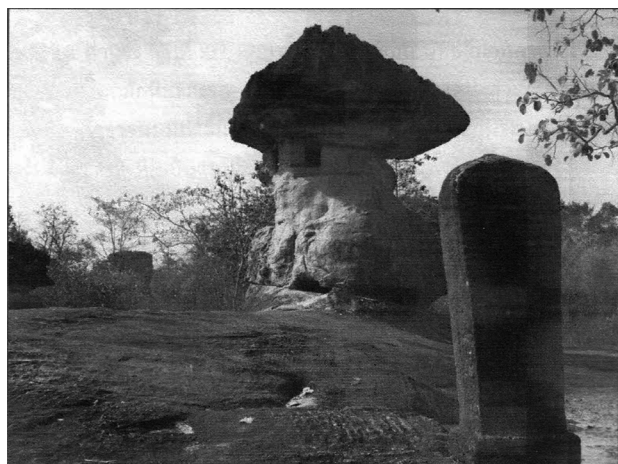
3はセーマ石が配置される遺構をシーマーとして捉える観点である。シーマーの規模については、1932年にカンボジアの仏教協会が出版した文献に言及があり、セーマ石で囲まれる土地は小さすぎても大きすぎてもいけないという（Giteau 1969）。また、現代の寺院では得度を行うには、10人以上の僧の列席が必要であり（石井1991: 69）、ある程度の空間を確保する必要があると指摘できる。つまり、セーマ石が方形状に配置される結界でも、極端に小さいものは布薩堂や本堂と同定することはできず、別の対象物である可能性を検討する必要がある。例えば、4-3の項で結界の対象物としてあげたbの「建造物を



第8図 ワット・ドンタオカオのセーマ石配置



第9図 マハシーマーとカンダシーマーの概念図



第10図 プープラバート歴史公園の笠形奇岩を囲むセーマ石配置

必要としない儀式空間」がこの場合想定できる。また、Murphyはムアンセーマの発掘調査の成果を検討する際に、在家信者が集まって祈りの場として利用する本堂の方が、儀式の際に寺院の僧を収容できればよい布薩堂より、大規模な建造物であると判断し、モニュメントの大きさの違いによって布薩堂と本堂をそれぞれ比定している (Murphy 2013)。このように、セーマ石の配置からシーマーの規模の大小を捉えることができる場合、布薩堂と本堂の規模に沿った分類ができる可能性がある。

さらに、上記の3視点による分類に加え、類型別の分布域の検討も必要である。既往の研究で検討されてきた環濠集落遺跡や盛土遺構との関連性の有無についても、セーマ石の遺構配置の観点を新たに導入した場合、再検討すべきである。

このような観点からの分析により、セーマ石の配置にさまざまなバリエーションが見いだせた場合、ドヴァーラヴァティー時代の東北タイでのセーマ石を置き結界をつくるという行為は、現代の寺院で使われているものと比べると、幅をもった用途で使用されていることが指摘できる。セーマ石が現れたドヴァーラヴァティー時代はさまざまな種類の結界を形成していたが、スコタイ、アユタヤー時代と経ることで、その用途が徐々に限定・固定化されたということを示唆できる可能性がある。

おわりに

現在手に入るセーマ石の配置がわかる平面図の不足により、残念ながら、本稿では分類の試案を提示するにとどまるが、今後現地調査を重ねることで、セーマ石の平面配置のデータを集積し分析していく所存である。その際に、ドヴァーラヴァティー時代のセーマ石配置を、セーマ石で結界される対象物が現在も確認可能であるアユタヤー時代やラタナコーシン期以降のものと比較することで、結界の対象が考察可能になるのではないかと。もちろん、時代の隔たりや、仏教の担い手がモン人とタイ人で異なることを考慮に入れる必要があり、比較は慎重に行っていく必要があるだろう。

このように、新たな視点と旧来の研究を組み合わせた複合的な分析を行うことで、サンガなどの仏教僧団の規模や信仰の広がり度合いを検討する必要があると考える。さらには、セーマ石の配置構造という観点で、従来の研究で議論の中心となってきたタイ中部と東北部との間で違いがみられるのかどうか、ドヴァーラヴァティーという文化がどのような様相であったのか、資料集成と客観的な観点からの精緻な分析によって検討することが求められる。

註

タイ語のカタカナ表記は、日本タイ学会（編）2009『タイ事典』に準拠することを基本とした。ただし、再読する末子音につながる促音は「ッ」と表記しない。例：アユッタヤー、ラッタナコーシン→アユタヤー、ラタナコーシン

- (1) 11～12世紀にタイ北部に栄えたハリブンチャイ (Haripunchai) 王国もモン人の国で、仏像など特徴は中部のドヴァーラヴァティーのものと同じで知られているが（原田2017a: 15）、通常ドヴァーラヴァティーには含まれない。
- (2) セーマ石は、タイでは一般的にバイセマー (ใบเสมา) と呼称されている。バイはタイ語で「葉」を意味し、アユタヤー時代以降のセーマ石の典型的な形態である蓮弁型の形態に由来する (Murphy 2010: 87)。セーマは、サンスクリット語で境界を意味するシーマー (sima) を語源とすると考えられている (Paknam 1981: 57)。英訳には *sema stone*, *boundary stone* などの呼称が用いられている (FAD 2009, Murphy 2010)。
- タイ語の発音に従えば、本来的には「セーマー」と表記すべきところであるが、境界を意味する「シーマー」と区別し、境界をつくりだすものそれ自体であることを明示する意味をこめ、本稿では、新田 2005、2013での表記に倣い、「セーマ石」という呼称を用いることとする。
- (3) 法輪は、車輪が転がるようにブツダの教えが広まることを意味し、仏法の象徴である。仏教の伝播した国には必ずみられる造形であるが、タイではドヴァーラヴァティーの中心地だと考えられているナコーンパトムやウートーンを中心に、50点を超える法輪が見つかっており、インドでさえもこれほどまとまって出土した事例はない。ドヴァーラヴァティーの法輪の特徴は、前面に幾何学文様や植物文様が彫刻されている点であり、この地で独自に発展した仏教遺物であるといえる (原田2017b: 56)。
- (4) 直訳すると、「板型」とでもいうべきであるが、「仏教施設の聖俗空間の境界に立てられたハスの花卉形をした板石のセーマ石 (新田2013: 34)」という記述もあるように、実際には蓮弁の形をしているセーマ石をこの分類としていることから、本稿では「蓮弁型」とする。
- (5) クンバ (kumbha) とはサンスクリット語で、水瓶や壺を意味し、仏教、ヒンドゥー教双方でみられるインド起源のモチーフである (Murphy2010: 312-

313)。特に、*puṇnaghata* (満瓶) は豊穡や源泉のモチーフとして好まれて用いられ、タイではドヴァーラヴァティー美術によくみられる (FAD2009: 104)。

- (6) Murphyは、ドヴァーラヴァティー時代に置かれた当時のままの位置を保つと判断した基準について論文内では言及していないが、1. 発掘によって出土したもの、2. (寺などに移動されておらず) 野外に立っているもの、3. 円状などの何らかの平面形態をもって置かれているもの、を原位置を保つセーマ石として判断しているという (Murphy: *personal communication*, Dec, 2018)。

引用文献

- 石井米雄 1990『タイ仏教入門』めこん。
- 原田あゆみ 2017a「タイ～仏の国の輝き～」『日タイ修好130周年記念特別展 タイ～仏の国の輝き～』九州国立博物館他編、12-23頁、日本経済新聞社。
- 原田あゆみ 2017b「法輪と境界石」『日タイ修好130周年記念特別展 タイ～仏の国の輝き～』九州国立博物館他編、56-57頁、日本経済新聞社。
- 新田栄治 2005「ドヴァーラヴァティーの都市と構造」『東南アジア考古学会研究報告』3、73-93頁。
- 新田栄治 2013「タイ：先史から古代・中世へ」『東南アジア古代・中世考古学の創生』、鹿児島大学法文学部人文学科比較考古学編、9-46頁。
- 日本タイ学会（編）2009『タイ事典』めこん。
- Diskul, Subhadradis. 1956. "Muang Fa Daed, Ancient Town in Northeast Thailand", *Artibus Asiae*, Vol. 19 (3/4): pp.362-367.
- Fine Arts Department of Thailand. 2009. *Dvaravati Art: The Early Buddhist Art of Thailand*.
- Giteau, Madeleine. 1969. *Le bornage rituel des temples bouddhiques au Cambodge*. Paris: Ecole Française d'Extrême-Orient.
- Groslier, B. 1980. "Prospection des sites Khmers du Siam", *Couts et profits en archeologie*, Paris, Centre de Recherches Archeologiques; CNRS. Republished in *Mélanges sur l'archéologie du Cambodge*. Réimpression de L'EFEO 10, 1997 pp.189-220.
- Karlstrom, Anna. 2009. "Preserving Impermanence. The Creation of Heritage in Vientiane, Laos", *Studies in Global*, Vol. 13: Uppsala University.
- Kingmanee, Arunsak. 1996. "Suvannakakkata-Jataka on a Bai Sema of Wat Non Silaatwararam/Baisema salak pahp

- Suvannakakata-jaduk jahk Wat Non Silaatwararam”, *Muang Boran*, Vol. 22 (2): pp.133-138.
- Krairiksh, Piriya. 1974. “Semas with Scenes from the Mahanipata-Jatakas in the National Museum at Khon Kaen”, *Art and Archaeology in Thailand*, pp.35-100.
- Lorrillard, Michel. 2008. “Pour une Géographie Historique du Bouddhisme au Laos”, *Recherches Nouvelles sur le Laos/New Research on Laos*, Yves Goudineau & Michel Lorrillard eds. pp.113-181.
- Murphy, Stephen A. 2010. *The boundary markers of Northeast Thailand and central Laos, 7th-12th centuries CE*. University of London.
- Murphy, Stephen A. 2013. “Buddhism and its Relationship to Dvaravati Period Settlement Patterns and Material Culture in Northeast Thailand and Central Laos c. Sixth–Eleventh Centuries a.d. A Historical Ecology Approach to the Landscape of the Khorat Plateau”, *Asian Perspectives*, Vol. 52-2: pp.300-326.
- Paknam, No Na. 1981. *The Buddhist Boundary Markers of Thailand*. Bangkok: Muang Boran Publishing House.
- Paknam, No Na. 1997. *Manuscript of Sima at Wat Suthat Dhepararam/Sima Gatah Samot kong Wat Suthat Dhepararam*. Bangkok: Muang Boran Publishing House.
- Seidenfaden, E. 1954. “Kanok Nakhon, An Ancient Mon Settlement in Northeast Siam (Thailand) and its Treasures of Art”, *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*, Vol. 44: pp.643-648.
- Thamrungraeng, Rungroj. 2018. *Main stone-Baisema Dvaravati culture in Northeast Thailand*
- Vallibhotama, Srisakra. 1975. “Sema Isan”, *Muang Boran*, Vol. 1(2): pp.89-116.
- Vallibhotama, Srisakra. 1985. “Sema Stone Boundary Markers from the Northeast: Survey and the Study on the Continuation of Megalithic Culture in the Region/Sema Hin Isan: Gahnsamruat lair sueksah gahn sukneuang kong brapaynee bok hin tang nai sangkom pahk dawan orkchiangnuea”, *Muang Boran*, Vol. 11(4): pp.6-33.
- Wales, H. G. Quaritch. 1969. *Dvaravati: The Earliest Kingdom of Siam (6th to 11th century A.D.)*. London: Bernard Quaritch Ltd.
- Woodward, Hiram. 2005. *The Art and Architecture of Thailand, From Prehistoric Times through the Thirteenth Century*. Leiden, Boston: Brill.
- 第1図 九州国立博物館他編2017: 41「タイ全図」をもとに筆者作成。
- 第2図 Murphy 2010: 21, Figure 1.1 を一部改変。
- 第3図 Murphy 2010: 361, Figure 6.1
- 第4図 Murphy 2010: 157, Figure 4.13を一部改変。
- 第5図 2018年8月筆者撮影。
- 第6図 Murphy 2010: 99, Figure 3.9.
- 第7図 Murphy 2010: 87, Figure 3.1.
- 第8図 Thamrungraeng 2018: 305, Fig. 9.
- 第9図 Thamrungraeng 2018: 120, Fig. 3 を一部改変。
- 第10図 Thamrungraeng 2018: 325, Pic 190, Fig. 11.